ことばと文学Ⅱ　ラブレターは書きますか　担当：代田先生

試験内容：授業で紹介されたラブレターの一節を暗記してきて書き（だいたい合ってればおｋ）、その状況を説明した上で批評評論のコメントをつける。

三回分作ってみたけど、点数もらえるかは正直わかりません＞＜←

レジュメはちゃんと読んだほうがいいよ！

年表で黄色くなってるのがラブレターの時期です

第一回：郁達夫（いくたつふ）と王映霞（おうえいか）

＜郁達夫＞

中国の作家

没落地主の息子として生まれる、やがて父親は病死

初めは医学を志すが、日本への留学中に文科に移る

※日本への留学→自己負担

欧米への留学→欧米の援助（親欧派育成のため）

よって日本留学組のほうがエリート・・・って言ってたような気がする

母が決めた許嫁と結婚

映霞に出会い一目惚れ、結婚→重婚状態

映霞と関係が悪化すると、一時故郷の妻の元に帰る

関係を修復するが、やがて映霞の浮気を疑い始める

映霞は日中戦争の戦火を逃れるため疎開

いったん再会するが、口げんかののち映霞が出奔

新聞に行方を尋ねる記事を出すが「男と逃げた」という表現だったため溝が深まる

これは撤回するも最終的に離婚

＜王映霞＞

師範学校を出た小学校教師→自立した経済力をもつ

国共内戦で福建から上海に逃れ、達夫と出会う

知的な美人で、社交性にも優れていたので上海の社交界で活躍

【抜き書き部分】

私は妻に対して、結局は真情からの愛はありませんでした。だから結婚した後、今に至るまで六年になろうとしていますが、私が彼女と同居したのは、合わせても半年に満ちません。（注）

・・・（注）郁の先妻、孫茎のこと。この縁談が両親の言いつけで、いうべき愛情がなかったというのは、たぶんそうだろう。しかし６年近くになろうとしているのに、一緒に生活しているのが半年に足らないというのは、1,932年10月24日に孫茎を「あばずれ」と罵ったのと同様、王を求めるときの出まかせである。

【解答例】

20世紀初頭の中国には恋愛結婚は存在せず、親が媒介する家同士の結合としての見合い結婚が一般的であった。この手紙の筆者である中国人作家郁達夫もその例にもれず、幼い頃母親に決められた許嫁の孫茎と結婚している。しかし達夫は上海で王映霞に出会い一目惚れする。これはその頃達夫が映霞に書いたラブレターである。

注をつけたのは映霞である。1937年に日中戦争の戦火を避けるため富陽に移住した映霞は、達夫からの手紙をすべてトランクに入れて持っていったが、途中で紛失してしまった。映霞がなぜ手紙を持っていったのかは分からない。まだ達夫を愛していたからかもしれないし、達夫との離婚を考えてこれまでの夫婦生活の証明としたかったのかもしれない。とにかく映霞が紛失したトランクの中身は、数年後の40年代にとある文学青年が、駅の清掃員が焚きつけに使おうとしているところを見つけ保存したためこの世に残った。文化大革命でいくらかは散逸したが、残りは戦後に出版され、その際に小学校教師を退職して年金暮らしをしていた映霞の協力により注をつけたのである。

＋二人の関係について自分の思うとこ適当に（映霞はやっぱ達夫を好きだったから手紙も持ってたし注作業に協力したんだろうか、とか、なんでも）

第二回：胡適とクリフォード・ウィリアムズ

＜胡適＞

中国の文筆家

高級官僚の家の生まれ、母は後妻

父の死後、実母・自分・義理の兄弟という複雑な家族構成で暮らす

母の決めた相手と婚約

1914　大学教授の娘であったウィリアムズと出会う

1917　帰国、江冬秀と結婚

1933　渡米しウィリアムズと再会、愛が再燃し関係を持ったと思われる

でもそのまま帰国

1953　冬秀を伴って渡米、ウィリアムズに再会

＜クリフォード・ウィリアムズ＞

美人ではないが頭が良かったようだ

【抜き書き部分】

わたしがたったひとり結婚したい男性は、私が願っても願うことができない。

【解答例】

これは1936年にアメリカ人女性クリフォード・ウィリアムズが、中国人作家胡適に向けた手紙である。彼女はこの前に「とある男性から求婚されたのだがどうしたら良いか」という相談の手紙を胡適に送っており、「それはよかった」という胡適の返事を受けてこの手紙を出した。彼女はこのとき52歳であり、年齢的に独身を脱する最後のチャンスであった。ウィリアムズは胡適が既婚者であることは知っていたが、文章の端々から、胡適に結婚を止めてほしかったのがわかる。しかし胡適は胡適で、ウィリアムズと結婚することは決してできないのに親密な関係となってしまったために、彼女の人生を狂わせたという負い目を感じているため、止めようとはしない。胡適がウィリアムズを大切に思っていたことは確かであるが、それは恋愛感情ではなかった。

＋なんか自分の感想（ウィリアムズも既婚なの知ってたならしゃーないとか、胡適はもっと慎重になるべきだったとか）

第三回：丁玲と馮雪峰（この回寝てたので微妙です＞＜）

＜丁玲＞

中国の女流作家、毛沢東と同郷

地主の家に生まれるが、父親が病死し困窮

暮らしのため実家に戻り女子師範学校に入学した母から、多大な影響をうける

1924　胡也頻と出会い翌年結婚

1927　馮雪峰に出会う

1931　也頻が国民党に処刑され左傾化、馮達と同居

＜馮雪峰＞

左翼の作家、共産党員

【抜き書き】

私はといえば、きっといそいそと働きます。あなたが私がそうするのを好きだから。きっと理性的になります。あなたが私がそうするのを好きだから。私はきっと立派な人になって、どんな小さなことも揺るがせにしません。

【解答例】

これは1927年に中国人作家丁玲が、思い人である左派の作家馮雪峰に送った手紙である。丁玲はすでに胡也頻と結婚していた。

・女性からの告白は当時中国のジェンダー的に微妙？

・女性的、自立していない感じ←ってメモってあった